

読み聞かせ講座

「小学校で実践！
本の選び方から、本番まで」

講師：対馬 初音氏

(小学校司書)

本講座では、講師に対馬初音先生をお招きし、本の選び方を中心に、小学校での読み聞かせについて、お話いただきました。

対馬先生による読み聞かせや、受講生同士のワークショップも交えながら、子どもの心によりそった「いい本」の見極め方について、学ぶことができました。

【 小学校での読み聞かせの特徴 】

(1) 学校とはどういうところか

小学校での読み聞かせには、「子供たちが年齢別に一つの教室に集められている。」「本が好きの子、苦手な子、普段からたくさん読んでもらっている子、ほとんど読んでもらった経験がない子、と様々な子供がいる。」といった特徴があります。

(2) 保護者が求めることは

読み聞かせを行っている、という保護者の方は、一クラス一人か二人、多くても五人程度です。また、毎日本を読んでいるか保護者の方に訊ねると、一割ほどしか手は挙がりません。しかし、本と子供が仲良くなってもらいたいかを訊ねると、今度はほぼ全員が手を挙げます。保護者の方は、学校での読み聞かせにお楽しみ会を求めているわけではなく、いい本を読んでもらうことを期待しています。



(3) 子供が得るもの

子供たちが読み聞かせによって得るものには、以下のようなものがあります。

- ・素晴らしい本との出会い
- ・楽しいひと時、疑似体験
- ・聞く力、集中する力、楽しむ力、心の成長
- ・読書への興味、発展
- ・「本の世界は面白い」という本への信頼

特に、「本の世界は面白い」という、本への信頼感が一番大切です。子供たちは、ぴたっと合う物語を手渡すと、一度に信頼してくれます。逆に言うと、絶対に失敗してはいけません。だから、選書が大切です。

【 本を選ぶ 】

対馬先生に四冊の絵本を読み聞かせしていただき、その本についてどう感じたかなどを、四人一グループになって話し合いました。その後、対馬先生より講評をいただきました。



(1) いい本とは

読み聞かせに使えるいい本というのは、子供の心にそって、子供の視点で作られ、子供の心を満たしてくれる本のことです。

また、大人が登場する場合、安心できる存在として描かれていることも大切です。子供は社会的に弱いため、大人が助けてくれる存在として出てこない本は、小学校での読み聞かせには絶対使ってははいけません。

そして、しっかりしたストーリーと、それに合った読み聞かせにふさわしい絵であるということも、いい本の条件として欠かせません。きちんとした日本語で書かれた、きちんとした絵の本を選びましょう。

(2) 本を選ぶにあたって

「いい本」の多くはロングセラーです。しかし、多くの子供は、ロングセラーでも読んだことがありません。子供にとって、初めて出会う本はすべて「新しい本」です。

もちろん、ロングセラーだからといって必ずしも読み聞かせに向かいいい本だとは限りませんのでご注意ください。

途中で子供たちの反応を試そうとせず、間違いないと思える本だけを、ずっと使い続けるようにしましょう。

(3) 昔話

昔話絵本は、同名絵本が多く出ているので注意しましょう。ストーリーに極端なアレンジや脚色を加えられておらず、元の話にそっているものを選ぶようにしましょう。

きれいな日本語で書かれているか、絵が適切かも大切です。

『だいくとおにろく』（松居直／再話 赤羽末吉／画 福音館書店）『三びきのやぎの がらがらどん』（せたていじ／やく マーシャ・ブラウン／え 福音館書店）などの一部を除き、読み聞かせに使えるような昔話絵本は少ないです。できれば、ストーリーテリングがいいでしょう。

【読み聞かせに際して】

(1) 読み聞かせをする前に

まずは、本日お配りしたリストの本を、図書館で探して読みましょう。そして、気になる本を借りて、声に出しながら読み、読み聞かせに使用したい本を決めましょう。

読み聞かせを行う前に、開きぐせを必ずつけましょう。新しい本は開きにくいです。

また、声を出して10回は練習をしましょう。自分に対して読み聞かせを行うつもりで読んでいきます。10回読んだら飽きてしまうような本は、読み聞かせに使ってははいけません。

(2) 読み方の注意

横書きの本は右手で、縦書きの本は左手で持ちましょう。主役は、読み手ではなく、本の中身です。本の読み方は工夫をするのではなく、本の求めるままに物語を読んでいきます。文字をただ追ったり、声色をつかったりするのではなく、クライマックスや会話に注意し、お話の流れにそって読み手も気持ちを動かし、それを声にのせて読んでいきます。

語尾まではっきり、ゆっくりめに読むよう心掛けましょう。

(3) 学校での実際

教室の席のままではなく、前の方に子供たちを集めてもらった方が読みやすいです。

声は、後ろの壁から跳ね返った声が自分で聞こえるくらいが目安です。

また、読んだ本が図書室のどこにあるか確認し、子供たちに手渡せるようにしましょう。もし読み聞かせに使用する本が図書室になければ、近くの図書館で借りられるのか、確認しましょう。

ボランティア同士でプログラムを調整しましょう。可能であれば、一年生から六年生まで、「今回はこの本を読んだから、次回はこちらを」といったように、段階を踏んだプログラムを組めると理想的です。

(記録：埼玉県立久喜図書館 近藤 梨乃)